

はじめて特支学級を担当して思ったのは、作業環境が整っていないことでした。

しかし幸い設置校である舟形中学校は特支教育に対して理解と協力体制がありました。

小学校時代の担任とも日々情報交換が出来ました。

本当の小中連携とは会議で一緒にすることでなく、相互信頼をして、困ったとき、必要に応じて情報交換や助言が得られる事だと実感しました。

おかげでいろんな活動が出来ました。

このことは長く小中併設校や小学部から中学部へ持ち上がりをした経験からいえます。これは別の機会に述べます。

生徒は進路を高等養護学校を考えていたので、本格的な作業はすべきと思いました。

そこで作業所に定期的に現場実習にいて作業を進めました。

現場実習で石鹸造りをしてそれを文化祭で販売する活動を行いました。

たんぽぽ作業所という当時の小規模作業所で、家庭用の廃油で石鹸を作って市役所などに販売していました。

現場実習で一緒に石鹸を制作し、制作のノウハウを得て学校でも制作できる設備を整え、制作を継続しました。町の支援、保護者・学校の理解があっはじめて出来た実習と制作です。

出来る自治体が限られると思います。製品を販売という形で社会に提供するのも作業学習のうちです。金銭的なやりとりがまだ不十分でした。これも課題の一つでした。

制作していた「買い物学習アプリ」の他に「石鹸を売ろう」という専用の石鹸販売アプリと石鹸制作アプリを制作し、困ったときにアプリに戻って学習できる形を整えました。

作業という学習形態を現場実習、校内作業、販売、ICT学習と融合させた学習でした。

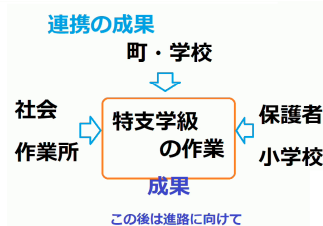
もう一つ加えれば通常学級との交流です。

特支学級での作業

進路を考えた必要性

作業所に現場実習

町・学校・保護者の協力



作業

現場実習 ・ ・ 本格的な作業への移行

校内作業 ・ ・ 校内の作業学習の充実

販売 ・ ・ 数学・買物学習の応用

ICT学習 ・ ・ 疑似体験で応用力向上

+ 交流 ・ ・ 実習や作業販売アプリを通して

作業所に実習に行き
連携して石鹸づくり



学校内で制作を継続

文化祭での販売の準備



「石鹸を売ろう」のアプリ制作は通常学級の女子生徒が興味を持って制作に協力してくれたアプリです。アプリ内の登場人物や音声は学校の女子生徒が協力してくれた物でした。

そして石鹸は文化祭で販売できました。

作業とは地域や就労先、学校や家庭との連携が出来てはじめて効果が出るものだな、と実感しました。このような形で町、学校、保護者、小学校とも理想的な形で連携できました。

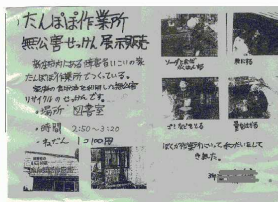
これから作業だけでなく進路先も巻き込んだ生活单元を組んだのですが、それも別に提示いたします。



文化祭での石鹸販売



↑販売の様子



↑販売パンフレット

END



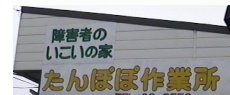
石鹸販売で
お金受け渡し
石鹸種類
おつり等
販売疑似体験
をするアプリ

特支学級での作業

作業所に実習に行き
連携して石鹸づくり



文化祭で石鹸販売



現場実習や
作業の工程を
振り返る
シュミレーション
アプリ